若林敬子著

『日本の人口問題と社会的現実』
第１巻理論編　および　第２巻モノグラフ編

東京農工大学出版会，2009年10月，pp.452およびpp.374

本書の著者は周知のように中国や日本の人口問題を中心に多くの著作をものにしている．本書は40年にわたる日本の人口研究の成果について学術論文等のままであったものを，大学定年を機にまとめられたものである．理論編とモノグラフ編の２冊からなる計800頁を超える大作である．16章に分かれる理論編では，最初に日本の人口問題の概要が書かれている．その後に，人口移動，社会開発・コミュニティ論，教育，留学生，高齢女性の問題，そして農村研究の論文が続く．著者が研究者として出発した1970年代初め，人口研究を行う若い研究者は少なく，たとえそれに手を染めても，自分の出身母体のディシプリンを前面に出す研究が多かった．当時の著者も教育社会学や農村社会学の新進気鋭の研究者であったが，「人口問題」を意識した文献は少なかったと思う．その後，中国の人口問題に手を広げ，そして現在，著者の学問の中心は広い意味での人口学で，「人口問題」というタイトルを積極的に出している．この間の著者の「人口」に対する思い入れの変遷は何だったのであろうか．

その理由を簡単に答えることはもちろんできないが，研究の出発点と人口をめぐる変化が関係していたことはひとついえるであろう．著者は，理論編でも取り上げているように，研究の出発点から常に，経済発展と関わる農村，学校とコミュニティの関係，そして女性問題，特に高齢女性問題等という，地域社会の最も基礎的な問題を対象として，そこに住む人びとの相互連帯と地域の発展を念頭に置く分析を貫いてきた．これら多くの問題は，その後の日本の人口変化の過程とともに，その地域固有の人口移動，人口構成や出生，死亡等の人口動態の変動とダイレクトに関連し，少なくとも人口の問題でもあることを意識した研究課題にしないと分析が進まない状況になってきたといえる．これは新しい人口社会学の道を開いたと言ってもよいもう一方の貢献につながったと考えられる．

さらなる貢献は９章からなるモノグラフ編である．そこでは日本の経済発展から取り残された離島，キリシタン集落，限界集落等を対象に，それらの衰退過程を人口静態，動態，そして移動の生々しい変動を軸にしながら記述している．どの地域もかつてはそれぞれの地域の自然条件を最大限に生かしながら生産力は低く厳しい生活ではあっても，地域外へ多くの人びとを出さざるを得ないような状況ではなかった．高度成長の過程で，そのような地域は，生産と生活の困難性と人口流出および出生率低下・死亡率上昇を経験する．地域の人びとにとっては否応なしに人口から衰退していく状況の記述がそこにある．著者はいわゆる周辺化された地域の衰退過程を，人口過程の急激な変化を含めながら読ませるモノグラフとしてものにした功績は大きい．同じ地域分析を行う評者にとっても，著者の人口過程の変化からみた地域へのまなざしには共感できるところが多い．

次に，それではこのような地域は今後どのような道をたどることが望ましいのかという質問が誰にも出てくるが，ここでみた離島，キリシタン居住地域，限界集落等，実はかなり異なった様相を示す地域である．むしろ，私たちはもっと多様な「地域」を真剣に考えなくてはいけないのだ，という暗黙の示唆が今後どうすべきかの答えなのであろう．特に東京を中心とする同質的な大都市圏に住むものにとって，同じ生活を営むが異なった「地域」に住む人びとのこの静かなる叫びをどのように受けとめるのか．この問いは，地域の人間の生き様を示す人口と自然・社会・経済との関係を克明に記した地域人口誌の大事さを示してくれている．このような人口誌は分野を問わずこれからももっと必要になろう．定年を感じさせない研究活動を示す著者に引き続き優れた人口誌を著してもらいたい．

本書２冊は章ごとに執筆時期が違うためもあり，必ずしも統一された構成ではないが，全部を読んでみることで私たちがもっと意識して考えるべき人口と地域と社会・経済の関係がみえてくると思う．それらの関係をより深くみつめてみたい人びとにお勧めしたい．　（高橋眞一／神戸大学名誉教授）